

テモテへの手紙第二3章1-9節 「困難な時代」

1A 自分を愛する者 1-4

2A 真理に背く者 5-9

本文

テモテへの手紙第二 3 章の前半を今晚は学びます。テモテへの第二の手紙が書かれた背景を思い出していただきたいですが、パウロのもとから多くの同労者が離れてゆき、違った教えを言い広めている者たちがたくさんいました。教会は、イエス・キリストの真理ではなく、まったく違う土台の上に建てられていました。これを「背教」と呼びます。パウロはこのような状況の中で、それでも信仰を保っていき、信仰の戦いについて語っています。この背教の時代について詳しく話しているのが、この章です。

1A 自分を愛する者 1-4

1 終わりの日には困難な時代がやって来ることをよく承知しておきなさい。

パウロは、自分の死期が近づいている、自分の終わりが近づいていることも意識しながら、この世界にも終わりがあることを意識しながら書いています。「終わりの日」であります。キリスト者の信仰は必ず、終わりの日があつてこそその今の時代という視点を持っています。聖書にある「終わりの日」が出てくるのは、実に最初の書物、創世記であります。ヤコブが間もなく自分の死ぬことを知って、それで息子十二人を寢床に呼び、そして預言しました。「49:1 ヤコブはその子らと呼ばせて言った。「集まりなさい。私は終わりの日に、あなたがたに起こることを告げよう。」それぞれの息子に対して預言しながら、各部族の終わり、神の救いの完成についてヤコブは預言をしました。主は、預言者イザヤによって、「46:10 わたしは、終わりの事を初めから告げ、まだなされていない事を昔から告げ、『わたしのはかりごととは成就し、わたしの望む事をすべて成し遂げる。』と言う。」とされています。したがって、キリスト者は終わりの日を思わずして、今を生きることはできない信仰を持っています。

そして、それが「困難な時代」と言っています。ここで使われている「困難」のギリシヤ語は、マタイ 8 章 28 節にある「狂暴」という言葉と同じです。ガリラヤ湖の向こう岸に、ガダラ人が住む地にイエスが来られましたが、そこでイエスに会いに出てきたのが、悪霊につかれたふたりの者です。墓からやって来ました。「彼らはひどく狂暴で、だれもその道を通れないほどであった」とあります。つまり、霊的な反対勢力が猛威を振るう時代であると言うのです。ヘブル書 1 章 2 節には、終わりの時代に御子が現れた、とありますので、イエスが初めに来られた時から、終わりの日にある困難さが既に始まっていたと言えます。主が来られたことによって、悪霊の働きが活発化し、その働きに反対していた、ということです。「マタイ 1:12 バプテスマのヨハネの日以来今日まで、天の御国

は激しく攻められています。そして、激しく攻める者たちがそれを奪い取っています。」とイエス様は言われていました。

そのような反対があつて、そこで私たちの罪のために主が死なれ、三日目に甦られました。その復活をもって、また十字架による贖罪をもって、私たちは勝利者とされています。「コロサイ 2:13-15 あなたがたは罪によって、また肉の割礼がなくて死んだ者であつたのに、神は、そのようなあなたがたを、キリストとともに生かしてくださいました。それは、私たちのすべての罪を赦し、いろいろな定めのために私たちに不利な、いや、私たちを責め立てている債務証書を無効にされたからです。神はこの証書を取りのけ、十字架に釘づけにされました。神は、キリストにおいて、すべての支配と権威の武装を解除してさらしものとし、彼らを捕虜として凱旋の行列に加えられました。」ですから、私たちは御国の市民として、激しい霊の戦いの最前線に立っているという視点を持つことはとても大切です。

そして、主が間もなく来られる直前においては、この戦いが激しく、圧迫も大きいということをパウロはテモテに教えていますし、他の手紙でも教えています。5 節にありますが、「見えるところは敬虔であっても、その実を否定する者になるからです。」とあるように、教会において信仰から人々を切り離す動きが起こることを預言しています。私たちはエレミヤ書を学んでいますが、実に祭司の町から偽預言者ハナヌヤが現れました。神の家から、偽預言が始まりました。そして、イエス様は、「マタイ 7:15 にせ預言者たちに気をつけなさい。彼らは羊のなりをしてやって来るが、うちは貪欲な狼です。」と言われました。羊のなりをしていて、狼なのだということです。

使徒たちは、この霊的現実を直視しており、パウロはテモテへの手紙第一ではこう言っていました。「1テモテ 4:1 しかし、御霊が明らかに言われるように、後の時代になると、ある人たちは惑わす霊と悪霊の教えとに心を奪われ、信仰から離れるようになります。」信仰から離れさせる悪霊の教えがある、というのです。そしてテサロニケ人への第二の手紙 2 章にはこうあります。「2:3 だれにも、どのようにも、だまされないようにしなさい。なぜなら、まず背教が起こり、不法の人、すなわち滅びの子が現われなければ、主の日は来ないからです。」まず、背教が起こるのです。教会であるのに、真理を捨て、不法の行ないをしているという状況が起こるのです。それから、不法の人が来ます。そしてパウロは、不法の秘密が今も働いているが、引き止める者があつて、それで不法の人が現れていないと言っています。

2 そのときに人々は、自分を愛する者、金を愛する者、大言壮語する者、不遜な者、神をけがす者、両親に従わない者、感謝することを知らない者、汚れた者になり、

パウロは初めに、「自分を愛する者」と言っています。これが、すべての悪の始まりです。自分を愛しているから、金を愛したり、大言壮語する者になったりします。イエスは言われました。「だれでもわたしについて来たいと思うなら、自分を捨て、自分の十字架を負い、そしてわたしについて

来なさい。(マルコ 8:34)」また、こうも言われました。「『心を尽くし、思いを尽くし、知性を尽くし、力を尽くして、あなたの神である主を愛せよ。』…『あなたの隣人をあなた自身のように愛せよ。』(マルコ 12:30-31)」このように、キリスト者の生活は自分を愛することとは、無縁の生活、いや自分への愛から離れ、神また隣人を愛することがその生活の特徴です。

神は愛です。そして神が私たちがキリストにおいて愛してくださいました。その愛を私たちがどれだけ知っているのか？罪人であったのに、神の怒りを受けるべき者であったのに、しかし御子をご自分の肉体にその怒りを受けてくださった。その愛に私たちは感動し、また応答します。罪を捨て、そしてただキリストの十字架にある神の憐れみに飛び込みます。2節から4節に書いてあるのは、神を認めない不信者たちの特徴として、パウロはローマ 1 章で列挙している内容と似ています。「1:28-31 また、彼らが神を知ろうとしないので、神は彼らを良くない思いに引き渡され、そのため彼らは、してはならないことをするようになりました。彼らは、あらゆる不義と悪とむさぼりと悪意とに満ちた者、ねたみと殺意と争いと欺きと悪だくみとでいっぱいになった者、陰口を言う者、そしる者、神を憎む者、人を人と思わぬ者、高ぶる者、大言壮語する者、悪事をたくらむ者、親に逆らう者、わきまえのない者、約束を破る者、情け知らずの者、慈愛のない者です。」

ところが、自分を愛するという教えが教会の中にも入り込んで来ています。それは「自分を愛せよ」という教えです。聖書は自分を愛しなさいという命令は一つもない、それは前提として書かれていて、「自分自身を愛しているように、隣人を愛しなさい。」という命令になっています。自分を憎んでいると言っている人が、実はその自己憐憫が自分をとても愛していることの証拠なのです。まことに自分を憎んでいる人は、自分を忘れています。キリストで心が一杯になって、神を喜び、自分はどうでもよくなっています。それが結果として、健全な自己像を持てるになっています。なぜなら、このような、死んで神に裁かれるしかない憎まれ者を、神はその愛のゆえに敢えて選ばれ、救い、恵みによって尊いと言われるのですから。

しかし、神のキリストにあるこの恵みを拒んで、キリストの十字架を通らないで自己像を求めようとする。これが諸悪の根源です。自分が大切にされていない、自分がこんなことをされている、自分が、自分が…と「自分」が大切にされることが、もっとも大事な価値観となっています。このような人たちに限って、「神は愛です」という言葉を使います。そして、自分のわがままをすべて神によって許してもらい、神ではなく自分自身が神としてふるまう、そんなことが今、最高の価値観とされています。これを別の言い方をすれば、「ヒューマニズム」です。人間至上主義であり、神至上主義に真っ向から対立しているのです。ダニエル書 7 章では、反キリストが第四の獣の一本の角にたとえられ、その角が「人間の目」を持っているとなっています。今現代はびこっている人間主義は、終わりの日の大きな徴です。

そして次に、「金を愛する者」とあります。テモテへの第一の手紙において既に、教会の中で金を愛する者が出ていることが警告されています。「6:9-10 金持ちになりたがる人たちは、誘惑とわな

と、また人を滅びと破滅に投げ入れる、愚かで、有害な多くの欲とに陥ります。金銭を愛することが、あらゆる悪の根だからです。ある人たちは、金を追い求めたために、信仰から迷い出て、非常な苦痛をもって自分を刺し通しました。」またヤコブの手紙においても金を持ちたがることについて、警告されています。これはクリスチャンが、金を持ってはいけないという教えではありません。不正の管理人の喩えにあるように、永遠の御国のために富をしっかりと運用しなさい、という教えもあります。むしろ、運用しない金銭の裏側には、分け与えない心、自分のとら取っておく心もあります。これは悪です。

そして、「大言壮語する者」「不遜な者」「神をけがす者」とあります。これらは、「知的傲慢」に関わる内容です。つまり、自分の思っていること、感じていることを絶対としており、自我が肥大化してしまっている状態です。です。「大言壮語する者」は、自分が持っていないものを持っているかのようにふるまい、宣伝する人です。宗教においても、いろいろなことをさせて、その後に来る約束を提供するけれども、決してその約束が実現しない、これが大言壮語です。そして、「不遜な者」です。この原語の元々の意味は、「度を超して輝く」です。私たちは、それぞれ神の恵みによって、信仰によって、置かれている領域があります。その置かれているところにとどまるとき、私たちから主の栄光が反映されるのですが、その領域を越えて振る舞っている時、「不遜な者」になっています。

そして、「神をけがす者」です。冒涇です。神の権威に公然と立ち向かうのですが、自分を愛する、大言壮語する、不遜になるというのは、そこに権威の下に自分を従わせることができないという大きな問題があります。確かに上に立てられている者たちに力の乱用があります。今も社会的に、モラハラやパラハラという問題が取り上げられていますが、それは自分というものが正しく権威の下に置かれていないからです。人の魂は何か服従しなければやっていけないのです、人が重力の法則に従って生きることによってようやく生活ができるように、権威に従うことによって、初めて生きることができます。しかし上の権威はすべて神から来しているとローマ 13 章 1 節にあります。ですから、キリスト者であればその人間性を取り戻すには、自分の置かれているところで服従することによって、キリストに倣い、従うことができます。「エペソ 5:21 キリストを恐れ尊んで、互いに従いなさい。」

ところが、今、自分の感情や知性に反することを言うものなら、徹底的に相手を非難する傾向があります。それか黙っているのですが、絶対に相手を赦さないという傾向があります。これこそ、自分を愛している姿であり、自分を絶対化しているものであり、そして冒涇の罪につながるのです。終わりの日の反キリストが、ダニエル 7 章や黙示録では、「大きな口」を持っていて、神や天に住む者たちを罵り、冒涇している姿が出てきます。

そして次に、「両親に従わない者、感謝することを知らない者、汚れた者」と続きます。十戒において、神を愛するための四つの戒めが語られた後、すぐ現われるのが、「父と母を敬いなさい」です。子にとって両親は、神を表すための代理人です。子は両親に従うことによって、神に従うこと

ができます。そして律法では、両親を罵るものなら、彼は両親を証人として、人々によって石打ちによって殺されなければいけないほどであります。しかし、両親に従うというのは、愛によって従うものです。親が神に従っていない状況であるならば、親を敬いつつ、神に従う姿勢を見せていくことが必要です。それこそが、親自身が神に従うことができるようにする証しとなります。

「感謝することを知らない者」というのも、神を忘れていたことの証拠です。現代はこの罪で蔓延しています。神が主権者であり、この方が与え、また取られる方です。そのことによって、初めて神の賜物を感謝して受け取り、豊かになることができます。ところが、神が祝福に満ちた方であること、その賜物が受け取って当然の権利のようにみなすときに、その賜物そのものを偶像にしています。愛も平和も、何もかも、神から離れて語られる時に非常に危険です。キリスト抜きで愛、キリスト抜きで平和は、裏返すといかに非常であり、愛なきことであるかその偽善を見ます。キリスト抜きで平和は、悪を愛する者たちをますますはびこらせる、効果的な力となっています。そして、「汚れた者」は、思いや行ないが汚れていることです。心で悪意を抱き、そして行ないも改めようとしない態度のことです。

3 情け知らずの者、和解しない者、そしる者、節制のない者、粗暴な者、善を好まない者になり、

「情け知らずの者、和解しない者、そしる者」とありますが、情け知らずは、家族のような自然の愛を持っていない、という意味です。普通で考えれば、そんなことは決してしないと思うようなことを平気でできてしまう、自己中心性です。終わりの日に、「マルコ 13:12 また兄弟は兄弟を死に渡し、父は子を死に渡し、子は両親に逆らって立ち、彼らを死に至らせます。」とイエス様は言われました。そして、「和解しない者」は、一度、自分の感情が傷つけられたら、いつまでも恨む、赦す心がない状態を言います。次に「そしる者」ですが、これは悪魔や悪霊を呼ぶ時に使われる言葉でもあります。告発者、とも言い換えられます。人を責め立てる者ですが、ますます教会の中にもますますその傾向が大きくなっています。そして「節制のない者」というのは、このことと関連しており、自分の思いや気持ちに対して、自制が利かないでいる人々のことを言います。

「粗暴な者、善を好まない者」と次にありますが、「粗暴な者」は、穏やかという言葉の反対語になっています。キリスト者には柔和さが求められていますが、その反対に自分の義を主張していきます。「善を好まない者」とは、人が苦しんでいるときに、「おわかいそうに」と声をかけるかもしれませんが、その苦しみを和らげるようなことはしない者です。自分は関わりません、ということです。

4 裏切る者、向こう見ずな者、慢心する者、神よりも快楽を愛する者になり、

「裏切る者、向こう見ずな者、慢心する者」とありますが、「裏切る」という行為ほど、悪いものはありません。人々と共に生き、約束の中に生きているのに、そのふりをしていながら、実は他のものに忠誠を持っていたということです。そして、「向こう見ずな者」というのは、慎み深さ、冷静さの

反対であります。自分のしていることの結果を顧みない、どのようになるのか計算しない態度です。そして、「慢心する者」とは、高ぶりですね。テモテ第一 5 章で取り扱われている内容です。

そして最後に、「神よりも快樂を愛する」とあります。自分を愛する者から始まり、神よりも快樂を愛する者となっています。つまり、どこを愛しているのか、何を愛しているのか、ということでありませう。表向きはそうでなくても、その行いの実によって愛しているものが現れます。

5 見えるところは敬虔であっても、その実を否定する者になるからです。こういう人々を避けなさい。

ここまで語られてきたことは、教会の中で始まるという話です。神を知らない異教徒の振る舞いが、教会という形において行なわれていくということです。それがテモテ第一 6 章で、金錢を愛すること、高慢になって言葉の争いをしていること、テモテ第二 2 章において、情欲や言葉の争いの中に既に出て来ていました。

ペテロも第二の手紙で、偽教師の警告をしています(2 章)。ユダも同じように警告しています。

2A 真理に背く者 5-9

6 こういう人々の中には、家々にはいり込み、愚かな女たちをたぶらかしている者がいます。その女たちは、さまざまの情欲に引き回されて罪に罪を重ね、7 いつも学んではいるが、いつになっても真理を知ることのできない者たちです。

当時、家の中で教会がありました。そして、女は家にいることが多い中で、まだ心の定まらない人々を利用する輩がいました。鵜呑みにしてしまうこと、その権威を利用してペテロ第二 2 章にあるように、好色な行ないをすること、こうしたものがあり、これは実に現実にもものとなって教会で事件となっています。

そして「いつも学んではいるが、いつになっても真理を知ることにはできない」という状況も深刻です。多くの集会に通い、キリスト教の活動で忙しくし、たくさんの本を読んでいるのに、それでも、自分が抱えている問題を解決するのに、これらの活動が何ら貢献していない、ということがあります。むしろ、そのように多くを宗教活動に費やしているために、心や魂が疲弊して、罪の生活の中に入り込んでしまう人たちもいます。これは、それらの活動が、「真理」にしたがって行なわれていないことに原因があります。自分の気持ちや、精神的、心理的必要を満たしているのかもしれませんが、霊的必要を満たしていないことがあるのです。

8 また、こういう人々は、ちょうどヤンネとヤンブレがモーセに逆らったように、真理に逆らうのです。彼らは知性の腐った、信仰の失格者です。9 でも、彼らはもうこれ以上に進むことはできません。彼らの愚かさは、あのふたりのばあいのように、すべての人にははっきりわかるからです。

ヤンネとヤンブレとは、モーセがアロンとともにエジプトのパロのところに行き、さまざまな不思議と奇蹟を行なったときに登場した、魔術師たちです。二人の名前は出エジプト記に出てきませんが、パウロが他の文献でその名前を知ったのでしょう。この時の話を思い出すと、モーセとアロンは、イスラエルの神がおられることをパロに示すために、パロの前で、アロンの杖を蛇に変えました。ところがヤンネとヤンブレが、同じように杖を蛇に変えました。そこでパロの心はかたくなになりました。そして、モーセとアロンは、その杖を使って、今度はナイル川を血に変えました。ところが、この呪法師たちも同じことをして、パロの心はかたくなになりました。このようにして、神の証しを打ち消して、モーセが語った神のことばを、無きものにしようとしたのです。

言い換えれば、このような人々は、偽まがいのものを行ない、代替物をこしらえることによって、真理に逆らいます。私たちは、統一協会が偽りであることは、すぐに分かります。彼らは聖書を知らず、多くの異教的な行為を行なっているからです。しかし、キリスト教会と呼ばれているところで、いわゆる正しいことが90%行なわれ、10%だけが、微妙にずれているとき、私たちはそれを見分けることが難しくなります。そして、その中で傷ついた人々は、10%だけを捨てるのではなく、残りの90%の良いものも、捨ててしまうことがあります。これが悪魔の仕業であり、私たちが気をつけなければいけないのは、繰り返しますが、「見えるところの敬虔さ」なのです。

エジプトの二人の呪法師は、アロンが出したぶよを出すことができませんでした。そして、ついに、モーセがまき散らした、かまどのすすによって、彼らの全身毛が剃られた、つるつるの肌に膿が出来て、彼らは倒れてしまいました。同じように、偽まがいのことを行なっている者たちは、いつかはつきりと、すべての人にわかるようになります。

そして次回、後半部分で、このような困難な時代にいかに忠実に生きていくべきか、パウロは励ましを与えています。